

環境意識深めグローバルリーダー育成 —「アジア ユースリーダーズ」

(公財)イオンワンパーセント(1%)クラブ

事務局長 友村自生

「お客さまからいただいた利益を社会のために役立てたい」という思いのもと、イオングループが1989年に設立したイオン1%クラブは、2015年4月1日に内閣府から公益財団法人として認定された。25年以上にわたり「次代を担う子どもたち・青少年の健全な育成」のため、様々な活動を実施してきた。中でも、環境に優しい未来を目指す取り組みでは、小中学生対象の環境に関する体験・学習「イオン チャーズクラブ」や、日本と海外の高校生に異文化体験や互いの価値観を理解し合う場を提供する「ティーンエイジ アンバサダー」は代表的な活動といえる。

グローバル化が進む社会では、次代を担う若者たちが環境問題への関心を深め、価値観の多様性を受容し、リーダーシップを育むことが大切ではないか。そんな思いから2010年から「アジア ユースリーダーズ」を開始した。

具体的な啓発方法や政策を提案

「アジア ユースリーダーズ (Asia Youth Leaders)」とは、アジアの高校生・大学生が一堂に会し、開



ハノイ市天然資源・環境局へ大気汚染改善政策を提言する優秀チーム (ハノイ 2014年8月)

催国の環境・社会問題について英語でディスカッションを行うプログラムだ。単なるディスカッションに終始するのではなく、高校生は課題についての一般市民への啓発方法を、大学生は政府の政策をいずれも現地政府に提案することが本事業の特徴の1つといえる。

初年度は日本の大学生25人とホーチミン市国家大学・人文社会科学大学の学生25人が参加した。以降、参加国を拡大し、2015年現在では日本、中国、ベトナム、タイ、マレーシア、インドネシア6カ国の高校生・大学生が参加している。

実体験で環境問題への関心を深化

2014年8月、ベトナム・ハノイで行った大会では、参加者たちがデジタル粉塵計を持ち、市内の交差点、バスステーション、公園で、PM2.5の濃度を測り比較した。計測データに基づいて考察し、バイクなどの個人交通手段の急増がハノイの大気汚染の原因の1つであることを明らかにし、ミニバスのシステム展開などの対策をハノイ市天然資源・環境局に提言した。



交差点でPM2.5を測る学生 (ハノイ 2014年8月)



ゴミの山の中で使えそうなものを回収する人々
(ジャカルタ 2013 年 8 月)

また、2013 年 8 月のインドネシア大会では、参加者はジャカルタ郊外に位置するバンタルゲバン (Bantar Gebang) ゴミ処理場を見学した。分別されずに捨てられた山のようなゴミの中で、多くの人が再利用できるものを回収している姿を目にし、ショックを受けた日本の学生は少なくなかった。

見学後、ある参加者は「現在の日本では、ゴミの分別リサイクルをすることが当たり前になっていますが、このプログラムを通じ、日本周辺の国では違うということがはっきりと分かりました。少しでもインドネシアの環境の改善に役立てばと思いました」と感想を寄せた。環境活動は、その「少しでも」の行動を、皆で行うことにより大きな結果につながっていく。

多様な価値観、積極的な議論

1 週間のプログラムで実効性の高い提案するにはメンバー同士でいろいろなアイデアを話し合い、価値観の多様性を受容していくことが大事だ。

コミュニケーションにおける共通言語は英語だ。語学面では、本事業に参加する前提要件を IELTS (海外留学等のための英語能力テスト、主催：日本英語検定協会) 5.0 点以上 (高校生) と同 6.5 点以上 (大学生) としている。期間中は、専門家によるレクチャー、事務局連絡、6 カ国の混合チーム内での日常会話から専門用語の多いディスカッションまで全て英語で進行する。他国と比べ、日本の学生の英語レベルは残念ながらもまだ低く、自分の



改善策をチームでディスカッション (ハノイ 2014 年 8 月)

意見をうまく発言できない場面も多かった。

苦戦したのは英語でのコミュニケーションだけではない。チーム内で意見をまとめ、有効な提案に仕上げることが最も大変だ。自分と違った意見を「なるほど、そういう考え方もあるんだ」と素直に受け入れられたら、問題を別の角度から見つめられる。ただし、他人の意見を受け入れるばかりでは問題解決にはつながらない。6 カ国のうち、先進国である日本で日々当たり前に行われることが他国で直面している環境問題の鍵といえる。実際、審査員が評価した提案のほとんどが日本で実施されている内容だった。日本の学生が積極的に意見を主張しなければ、そのような結果にはならなかっただろう。

語学力、多様な価値観の受容、積極性、この3つの要素はグローバル化していく世界でますます重要になっていくものと考えている。

次代を担う若者たちへの期待

プログラム終了後、参加した日本の学生と何度も会う機会があった。そのたびに彼らが自信を持ち、積極的に他人と交流する姿を目にして、この事業を始めたことは正しかったと確信した。社会問題に関心を持ち、変わりゆく世界を前に自ら考え、様々な人々と話し合い、周囲をリードしていくこと、こういったことが今後、次代を担う若者たちにますます求められていくだろう。 ■

◆イオンワンパーセントクラブ

<http://www.aeon.info/1p/>

◆イオングループの環境・社会貢献活動

<http://www.aeon.info/environment/>